

## 『外科理例』の鍼灸

上田 善信

日本鍼灸研究会

## 緒言

『外科理例』は明・汪機の撰じた外科書である。汪機（1463-1539）は安徽祁門の人、字は省之、石山と号した。父・汪渭について家学である医学を考究し、朱丹溪の学統を継承しつつ、気血の調和・補益を重視した独自の学説を展開した。著書に『医学原理』十三卷、『鍼灸問対』三卷などがある。『外科理例』（1531）は七卷、補遺一卷、附方一卷からなり、外科疾患に対する鑑別診断、治療原則、予後、鍼灸法、治験など154論を述べ、附方として265方を載せている。その内容は先行する外科書『外科精要』『外科心法』『外科發揮』などを参考にしたもので、朱丹溪、李東垣などの説とともに、薛己の影響が大きい。外科疾患に対する診察については、卷一・癰疽脈一で「今之瘍医多不診脈、惟視瘡形以施治法。蓋瘡有表裏虛実之殊、兼有風寒暑湿之變、自非脈以別之、安得而察識乎」として診脈の重要性を云い、その治療については、序文で「外科必本於内、知乎内、以求乎外、其如視諸掌乎」として内治を主とすべしと主張している。以下、四庫全書本を底本に、本書の鍼灸条文について検討した。

## 鍼灸条文の内容

本書の鍼灸条文は300条弱で、うち灸法条文が5割強を占めている。鍼法条文は鍼を用いた外科的用例が多く、灸法条文では隔物灸を頻用している。

## 1. 鍼法条文の内容

使用鍼の種類にかかわらず、患部へ施鍼して患部を切開し、膿血を取り除くことを目的としている。除去される膿血の量は2~5碗を限度とする。使用する鍼については卷一・鍼法総論五十一に「至於附骨疽、氣毒、流注、及有經久不消、内潰不痛、宜燔鍼開之。若治咽喉、当用三稜鍼。若丹瘤及癰疽、四畔赤焮、疼痛如灼、宜砭石砭之」とあって、症状による使い分けが指示されている。他に毫鍼、火烙鍼、蜈蚣鍼の使用も見られる。刺入の深さは、卷一・論膿潰四十に「薄皮剥起者、膿淺。皮色不變、不高阜者、膿深。淺者宜砭、深者宜鍼」とあるも、各条文における具体的指示は殆ど見られない。施鍼部位は概ね患部に限定されるが、卷六・咽喉一百二十三には少商穴への刺鍼の例も見られる。

## 2. 灸法条文の内容

施灸の目的について、卷一・灸法総論四十八では朱丹溪の説を引いて「火以暢達、拔引鬱毒」と述べている。他に、たとえば桑柴灸を用いる目的について、卷五・背疽一百十六に「此用氣尚虛也、用桑柴火灸以接陽氣」とする例がある。使用されている5種類の隔物灸（隔蒜灸、豆豉餅灸、附子餅灸、香附餅灸、木香餅灸）のうち、特に多用され且つ使い分けられているのは隔蒜灸と豆豉餅灸の2種類である。隔蒜灸を施しても痛みや熱を覚えなない場合には、直接灸をする場合も見られる。施灸の壮数については、灸法総論では「丹溪曰、頭為諸陽所聚、艾柱宜小而少、……少者三五壯而已。若猛浪如灸腹背、柱大数多」と述べているものの、卷四・乳癰に「若加艾火兩三壯於痛処」とある以外は直接灸、間接灸にかかわらず10の倍数（20壯~100壯）の多壯灸が採用されており、施灸の限度は「痛則灸至不痛、不痛則灸至痛」が大凡の目安となっている。

## 結語

鍼灸条文に見られる丹溪、東垣、元戎などの引用は、主に薛己の『外科心法』『外科發揮』から間接的に引用されたもので、その意味では本書は薛己の外科鍼灸を敷衍したものといえる。ただし、神灯照法を用いていないこと、蜈蚣鍼について論じていること、卷一・論灸刺分經絡五十で劉河間『素問病機氣宜保命集』卷下・瘡瘍論第二十六を引いて癰疽に対する歸經灸を論じていることの3点は、薛己とは異なっている。